

新連載 防災マニュアルは心の中に！

連載初回は「日常の中でできること」を考えます。

防災活動で「日常の中でできること」として、最も重要な『挨拶』からはじまり様々あるのですが、防災の危機管理には難しいことが混在しています。日常における安全安心からの安堵感と、災害に対して適切に備えをするという危機感です。相対するこのバランス感覚が非常に難しいのです。



マンションで例えれば、高層階で暮らす人が毎朝日の出を見て幸せを感じ、夕日を見て感謝する。また、1階で暮らすガーデニングの好きな人が専用庭を花でいっぱいにして近隣の目を楽しませてくれる。どちらも本当に穏やかな時が流れる幸せで平和な空間です。その空間を楽しむ人に「高層階は地震が発生すると、もの凄く揺れます。長周期地震なら大きな横揺れは止まらず、転倒して命を落とすかも知れませんよ」。また「1階に住んでいたら洪水の時は浸水してしまい上層階に逃げないと溺れて命を落とすかも知れませんよ」と伝えたとしてもどうでしょう。たとえ事実でも、人の幸せと平和を破壊する悪者のように思われてしまいます。しかし、幸せで平和な空間であったとしても、何にもしなくてもよいのかといえば、決してそうではありません。災害が頻発する今日、襲い来る危機に怯えるのではなく、それらのリスクに対処する必要があります。パニックにならず、決して脅さず理性的に向かい合い、感情的や不条理にならないように合理的な対応が重要です。



危機管理で更に難しいのは、モチベーションを継続できるかということです。有事が発生したときに備えがなければ大きなマイナスが生じます。そのときに「しまった！ やっときゃよかったあ〜」と、命に関わる後悔をすることになります。ところが備えをし続けて、有事が発生したときに勝ち取れるものは「あって当たり前。備えてあるので大丈夫だった」という事実になります。

では、台風の準備に置き換えて考えてみましょう。豪雨により室内に雨水浸入の可能性があるので、サッシに詰め物をして備えます。また、強風によるベランダの飛散物を防止する為に室内に取り込んで備えます。ところが万全な備えは、結果として勝ち取ることができるものは「何も起こらなかった」ということです。台風が直撃した場合も、大きく逸れた場合も「何も起こらなかった」と同じことが残るのです。この「何も起こらなかった」という状況に価値を見出し、喜びを如何に感じさせることができるかが、防災活動を取り入れた日常の『暮らす作法』というものです。

ところが「何も起こらない」ならばやらなくてもよいという人達がいるのも事実です。極端に言えば「何か起こってからやればよい」と考える『保全方法』の考え方の違いです。トラブル発生の都度、壊れてから修理をするのが「事後保全」。トラブル発生前に計画的に実施するのが「予防保全」と呼ばれるものです。

事後保全は「事故が突然発生する。修理の為に時間が長くなる。不意に多額の費用が発生する」等の問題点があります。



予防保全は「突発事故を減らす。故障時の停止時間を最短にする。品質の安定化が図れる。保全費が均一化する。設備の延命が図れる」等の利点があります。

では、防災活動に置き換えて考えてみましょう。



防災的事後保全（災害後に対処）の問題点は「災害は突然発生する。命が危険にさらされる時間が長くなる。日常の備えが無く不意に多額の費用が発生する」

防災的予防保全（災害前に対応）の利点は「災害による怪我や死亡を減らせる。命が危険にさらされる時間を最短にできる。日常的な備えで安心を図り、当たり前前の文化となり継続できる。命の延命が図れる」

ところが、一部の懲りない人達は、昨今の大きな災害を目の当たりにしても「事後保全」でよいと思っています。これが防災活動の進まない要因です。

これは『保険』と全く同じで、事故は起こらない起こさない大前提で車を運転する人がいます。そういう人達は「保険はお金が掛かる。無駄だ！」「何十年事故を起こしたことがない」だから保険に加入しないという考え方なのです。特に災害なんて「何十年に一度の災害」そんな有るか無いか判らないものの為に「備えなんて必要ない。お金ももったいない。無駄金はない」と備えを怠る人達は口を揃えたように仰います。

ところが「備えを怠る人」は、災害が発生すると「そんな話聞いていない。誰も教えてくれない」「困っているのだから助けてくれるのは当たり前だ。備えているなら分ける！」。そして、最も駄目な行為が「備えようとする人の活動を否定し、バカにしダメだしをするという防災活動の破壊者」と呼ばれる人の存在です。この破壊者は「備え」という「自己責任は放棄」していたにもかかわらず、「大災害発生」という看板を掲げ「権利の主張」をします。これが他人を感かせ、防災活動にブレーキをかける要因なのです。

さて、穏やかな時が流れる幸せで平和な空間を楽しむ人に伝えるべきことは、それを維持する為に「感わされず予防保全をする」ことです。そのヒントが、小泉八雲が記した実話「稲むらの火」の濱口梧陵さんの偉業「住民百世の安堵を図れ」にあります。 続く

今回は「感わされない予防保全活動」